

いわての農地と水路づくりの物語

農業農村整備「紙芝居」の紹介③ 農林水産部農村計画課



⑦お石の入った石の棺は、赤牛一頭とともに、川に沈められました。しかし、その後も災いは続き、ため池の完成までは10年余の月日を要したのです。



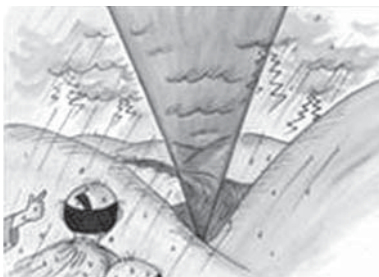
③工事は順調にはいかず、土手を築いては洪水で流され……。そんなことが3年連続で起こり、村人はすっかり意気消沈してしまいました。



⑧仙台に戻った川田勘裕は、毎晩のように、「暗～ぞお、暗～ぞお」という、お石の亡霊の声に悩まされ、ついには気が狂い死んでしまいました。



④「こんなに災難が続くのは川の主（ぬし）様の怒りに触れてしまったせいだべ」「生けにえに娘っ子を人柱に立てるしかねえべ」「んだ、んだっ……」。



⑨ため池の完成から約百年後、大雨で堤が決壊し、鉄砲水が村を襲いました。その時です！青い光の柱が天を貫きました。「お石のたたたりだぁ～！」。



⑤釜石から「お石（いし）」という19歳の娘が、銭千貫文と引き替えに連れてこられました。無論、当の本人は事の真相を知りません。



①その昔、金ヶ崎地方は何百年にもわたって、水不足が続いていました。渴いた農地では、ろくすっぽ米もとれず、村人は飢えと病気に苦しんでいました。



⑩村人は、ため池の高台に、観音様をまつり、お石と赤牛を供養しました。その後、たたりは無くなり、今では、千貫石ため池は地域の広大な田畑を潤す水源として親しまれています。



⑥「な、何するだっ、やめてける～」お石の悲痛の叫びに心を痛ませながらも、村人は石の棺桶に封をするのでした「お石、許してけるお～……」。



②江戸時代になり、川の上流にため池を造る工事が始まりました。工事の担当は、仙台から派遣された、川田勘裕（かわだかんすけ）という人でした。

農業農村整備紙芝居は、郷土の先人達が築き上げてきた農地や農業用水の開発の歴史を、次代を担う子どもたちに伝え、ふるさとへの愛着や施設への愛護心を持ってもらおうと、岩手県農林水産部が平成12年から取り組んでいるものです。

現在は、全門話をそろえ、毎年、小学校の出前授業や「いわて環境王国展」などの各種イベントで上演し、好評をいただいています。

このコーナーでは5話（毎回1話）に分け、農業農村整備紙芝居の内容を簡単に御紹介します。第3回目となる今回は、金ヶ崎町の千貫石ため池にまつわる、悲しい物語です。はじまり、はじまり……。

お問い合わせ
岩手県農林水産部農村計画課
電話：019-629-5666

・農業農村整備紙芝居は下記ホームページでも閲覧できます。
岩手県公式サイト → 農業農村紙芝居 でサイト内検索
・モバイル版は右のバーコードからアクセスできます。

